

あなたの会社は「補助金」を経営の時間にできていますか？

～技術を見つめ直す『棚卸しチェックリスト』～

「補助金の準備で疲れ切った」「申請が目的化してしまった」

そんな経験はありませんか？

補助金は『お金をもらう制度』ではなく、自社の技術と強みを見つめ直す絶好の機会です。次の項目をチェックして、「補助金を経営に活かす仕組み」が整っているか確認してみましょう。

1. 技術を整理できているか

- ☐ 自社の強みを『技術要素』として具体的に言葉にできている
- ☐ 補助金申請で使った表現を、普段の営業や採用にも活用している
- ☐ 過去の申請書を「技術の記録」として整理・保管している

2. 守るべき技術を意識できているか

- ☐ 補助金で得た成果やノウハウの中に、特許・意匠・商標の可能性を見出している
- ☐ 技術的な成果や改善内容を、知財としてどう守るか検討している
- ☐ 外部への発信前に、機密性や権利化の観点を確認している

3. 補助金を社内で共有できているか

- ☐ 申請内容や成果を社員と共有し、会社の方向性を一致させている
- ☐ 社員が自社の強みや挑戦を理解し、誇りを持てるようになっている
- ☐ 「補助金で考えたこと」を経営会議や方針発表の場で振り返っている



自己診断の方法

- 各項目で「はい」と思えばチェックを入れてください
- 合計チェック数で、今の状態を確認できます



判定と改善アドバイス

8～9 個：補助金が『経営の時間』になっている状態

⇒ 補助金を通じて、自社の技術と方向性を整理できています。

今後は、申請書や成果を「知財台帳」「技術ブランド資料」として蓄積し、未来の経営資産に育てましょう。

4～7 個：一部が弱い状態

⇒ 補助金は活用できているものの、『知的資産化』が進んでいません。

まずは「過去の申請書を開き、そこに眠る技術のタネを整理」することから始めましょう。

0～3 個：申請で終わっている状態

⇒ 補助金が「目的」になってしまい、本来の価値が活かされていません。

最初の一步は、「補助金で考えた自社の強み」を再確認し、社内で共有することです。



活用のポイント

このチェックリストは、採択率を上げるためのツールではありません。

経営者が補助金を『技術の棚卸し』の機会として活かしているかを点検するための第一歩です。

補助金を『申請』から『経営の整理』に変えることで、会社の技術が次のステージに進みます。